

## 5. 新刊書紹介 Books Review

### §『変貌と伝統の現代インド—アンベードカルと再定義されるダルマ』

編者：嵩満也（だけ・みつや）、著者は編者を含め 14 名（うち日本人 10 名）

出版社：（株）法藏館

価格：本体 2,500 円＋税 ISBN978-4-8318-6371-3

“はじめに”の中で編者は「アンベードカルの名前は、インド独立の父とも呼ばれるガンディーの名前に比べると、日本ではまだほとんど知られていない」と書いています。あのガンディーに優るとも劣らない偉大な功績を残したのにあまり知られていないのは残念だ。アンベードカルのことを知れば知るほど、その時代その場所に存在した、まさに現代インドにとって最も重要な人物の一人であったと考えられる。

アンベードカルは 1891 年、現在のマハラシュトラ州に生を受け、不可触民法として異例とも言える高学歴を修めた。経済的には比較的恵まれていて教育熱心な家庭で育ち、マンハイムのエルフィンストーン大学を卒業後、1913 年バローダ藩王の海外留学奨学金を得て、米国コロンビア大学で政治学博士号を取得、英国ロンドン大学で経済学を学び、帰国後は教育と不可触民の権利を守る運動に取り組む。1920 年別の藩王から援助金を得て、弁護士資格を取るためにロンドンに再渡航、ロンドン大学で経済学博士、法廷弁護士の資格を得て 1923 年に帰国した。少年時代に受けた被差別の苦い経験から、自ら学んだ学問を武器に政治・法曹・社会・労働・教育などの広い分野で被抑圧カーストの解放のために闘った。とにかく生まれてから死ぬまで休むことなく常に勉学と闘争を続けた人である。非暴力抵抗運動を主導していたガンディーとは、「塩の行進」の後の 1931 年、第 2 次英印円卓会議のため渡英直前に初めて直接会うことになる。不可触民問題に対する 2 人の考え方には疎み合わず、後にガンディーは「不可触民の（分離選挙の）権利要求を阻止する」ために死を覚悟の断食を始める。もしガンディーが死亡するようなことになれば、不可触民に対する暴力的な反発や逆襲・報復の可能性が高いことから、アンベードカルは権利を放棄せざるを得なかった。ガンディーは不可触民をハリジャン（神の子）と呼び、会議派はハリジャンの社会的地位向上に努めたものの、短期間でその運動は冷めてしまった。アンベードカルは会議派の運動は形式的で冷たいと批判した。自らをダリト（抑圧されている者）とアイデンティティを明確にし、はじめは不可触民制撤廃を「ヒンドゥー教内部の問題として解決しよう」と取り組んだが、次第にヒンドゥー教内部の改革に絶望し、1935 年には「ヒンドゥーとして死ぬつもりはない」と「インド文化に根差した別の宗教」への改宗を考え始めたと言われる。

1947 年にインドは独立。アンベードカルは憲法起草委員会委員長として新生インドの憲法を起草し、ネルー首相により初代法務大臣に任命された。分離選挙区制は採用されていないが、カースト差別の廃止、不可触民制の廃止、立法府、行政府における一定数の留保などが憲法に謳われ、1949 年に制憲議会で採択、1950 年 1 月 26 日に施工された。広大で多様なインドを、世界最大の民主主義国として一つに統合する基礎はアンベードカルによって築かれたと言っても過言ではない。その後ヒンドゥー法（家族法）改正の過程で保守派の強い抵抗に遭い、1951 年に法務大臣を辞職、仏教への傾斜を深めていたアンベードカルは 1956 年 10 月に妻や同胞数十万人とともに仏教への集団改宗式を行った。すでに病魔に侵されていたアンベードカルは 2 か月後の 12 月 6 日に他界した。新仏教徒の聖典「ブッダとそのダンマ」は、「仏教とは何か」を問い合わせ死の直前までアンベードカルが書き続けた書である。「ヒンドゥー教のダルマが儀礼の遂行や規則を意味している」のに対し、「ブッダの教えは道徳を意味している」としてアンベードカルはパーリ語の「ダンマ」を意図的に使っているという。「遅々として進む」と言われてきたインドは、様々な政治的、社会的そして宗教的障害を内在しながらも、特に 1990 年代以降大きな変化を遂げている。編者と専門分野の研究者とが、アンベードカルの思想と、その影響により政治、経済、社会、文化、宗教等々の幅広い分野で躍動的に変貌を遂げている現代インドの諸相を論考した興味深い書である。



（文責：日印協会参与 宮原豊）